

居住空間が人間に及ぼす影響——聖なる空間をめぐって

濱野清志・馬場天信・岡田 愛

I. はじめに

私たちの個々のパーソナリティ形成にはさまざまな要因が複雑に絡みあっていると考えられる。本論では、私たちが暮らす居住空間の質をそういった要因の重要なもののひとつととらえ、検討してみることにする。そこに注目することで、これまで臨床心理学的支援のあり方としてあまり議論されることのなかった物質的環境の質を問うという作業の中に、心の問題を考える重要な視点を見出すことができるのではないかと考えたからである。

II. 問 題

ここで問題とする居住空間とは、私たちが生まれてから原家族とともに暮らし成長してきた物質的環境である場の総体としてとらえることとしている。今日の私たちの暮らしぶりからすると、同じ一定の場所にずっと暮らす家族の割合は国民全体からすると以前に比べ減少してきているだろう。しかしそういった場合でも、家族との交流がなされる場は、それぞれの家族の生き方を反映するものであり、かりに引越しを多くしたとしても、移り住むそれぞれの住居にそれぞれの家族のもつ一定の心理的構造が持ち込まれることになるのではないかと推察される。

このように考えると、居住空間の質を問うことは、とりもなおさず、それぞれの家

族のあり方を問うことでもあるといつてよいであろう。そして、そこには家族成員同士の関係が自然と反映され、家族がどのような意識を共有して暮らしているのか、あるいは個々別々の行動をとっているのかなどがそこに映し出されるであろう。

たとえば、一家団欒のできる場が居住空間にあるかどうか、個室のつくりはどのようになっているか、出入りの自由さはどれくらいのものか、そういったことは確実に家族のつながりやプライバシーを大切にすることができるといえるかという点に関わってくる。また、そういった家族成員同士の動的ななかかわり具合に焦点を当てるだけでなく、家族がそれぞれ家においてほっとし、落ち着く場たらしめるような影響力を持つスポットを居住空間の中に探ることも重要なこととなろう。家の中には、食事をする場所などの活発な動きのあるところや、床の間のように静かで落ち着くところなど、家族成員に向けて一定の雰囲気を生み出す場があり、それらが生活に重層的な豊かさを付与していると考えることができる。

そういった意味での居住空間の質的な機能を、ここでは大きく次の二つに分けて考えてみたい。ひとつは、日常生活に必要な家族成員同士のやり取りなどの動的ななかかわりの場を提供する実際的な機能、もうひとつは、自分がそこにおいて家族の遠い来歴に触れたり、家族の一員であることに目を向けることのできるような気もちにさせる静的な影響力を持つ場としての機能である。

単純に言えば、前者は日常的空間のもつ働きであり、後者は非日常の空間のもつ働きである。

後者の非日常の空間は、眼に見えない形で間接的に家族のかかわりに影響を与えるものである。そういった空間のありようを自覚的に取り出し、家族がともに暮らすということの中にそういった非日常の空間があるという意識を持つようにすることは、臨床心理学的な家族支援を考えるときには非常に大切な視点となると考えられる。家族にさまざまな葛藤が生じ、成員同士の緊張が高まるとき、そこに家族外の独特な力が働くことで家族のバランスが調整しなおされることも多い。そういった家族外の力は、家族成員が共有して自然に大切にしてきたもの、家族成員同士が向き合うのではなく、ともにそれに向かって仲間であることを確認できるようなものがその力を発揮する。近年の臨床心理学研究では、ペットなどもその一つに挙げられているが（村瀬、1986、1987）、ここでは家族が共有して自然に大切にしてきたものを居住空間の質の一つとして取り上げ、そういった質の居住空間をその家庭が持っているかどうか、その家庭に育つ人々の人間関係の質に影響を与えているのかどうかを検討しようとするものである。そのため、そういった質の居住空間は、非日常の力を持つ空間、もしくは場であり、本論ではそれを「聖なる空間」と仮に呼んで論を進めていくことにしたい。

ところで、普段のルーティーンで動く日常生活とは異なった様相で、家族成員に自分たちの居場所がここにあることを提示する非日常の力を持つ家庭内の「聖なる空間」といえば、それは日本では仏壇や神棚のある場所を思いつく人が多いのではないだろうか。渡辺武信（1988）によると、建築という観点からみれば信心深い者ではなくともそれらは日常性を越える思考の窓口として使われるという。合理的思考では割

り切れない生活感情がそこで何らかの手当てを受けているというわけである。また、仏壇や神棚には実際に「この世ならざるもの」が祀られており、そこは他の居住空間には無い独特な異空間性、霊性が感じられやすい場となっている。

本論では、こういった仏壇や神棚といった伝統的形式にのっとり「聖なる空間」と、そういった伝統的な場では無いものの、家族がともに気づかい、大切に家庭の中のある特定の場にも着目し、これも「聖なる空間」の表れとして捉らえている。そして、「聖なる空間」が家族成員にどのような影響を及ぼしているのか、その一端を探ろうとした。

III. 目 的

「聖なる空間」を身近に体験していることは、さまざまな感情的体験を共にする家族成員同士にとってそれらの葛藤や軋轢を乗り越えて家族としてのつながりを維持することに役立ち、そういった経験がひいては他者一般への思いやりにもつながるのではないかと筆者らは考えた。そこでその点を、家族成員間のつながりや他者への思いやりといった心理的特性をとらえる質問紙と「聖なる空間」を身近に体験していることをとらえる質問紙について検討することで、明らかにすることを目的とした。

IV. 方 法

1. 質問紙の作成

1) 家族のつながり尺度

家族のつながりを測定する尺度として、現実と理想の家族機能を測定するために、Olson et al (1985) によって作成された Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scale-III (FACESIII) を、草田・岡堂 (1993) が和訳して作成した「家族機能測定」尺度に、筆者らが新たに考え

た項目を加え、「家族のつながり」尺度を作成した。

「家族のつながり」尺度は全28項目であり、評定は「当てはまらない」(1点)から「当てはまる」(5点)の5件法とした。得点は加算式とし、質問項目にあてはまるほど、家族のつながりの程度が高いとした。また、項目には逆転項目が含まれる。「家族のつながり」尺度全28項目を用いて、因子構造と信頼性を確認の上、必要であれば項目を絞り込むことにした。

この尺度の作成に当たって、2005年度3年生前期濱野ゼミ生が演習の中で家族のつながりを示す項目を自分たちで作成し、議論しながら少数に絞り込んでいった。その延長で、さらに尺度を検討しようとして上記の「家族機能測定」尺度を参考にすることになった。「家族機能測定」尺度のうち、凝集性(Cohesion)に関する項目は、ほぼ私たちが検討していた内容に合致しており、すでに作成していた項目と内容的に重なるものもあった。そこで、私たちの作成した項目の表現をベースに、「家族機能測定」尺度の凝集性に関する項目について文言をやや変更して加え、それを「家族のつながり」尺度とした。

2) 思いやり尺度

他者への思いやり行動を測定する尺度として、Rushton et al (1981)の愛他行動尺度を参考に、菊池(1988)によって作成された「向社会的行動尺度(大学生版)」全20項目の内、10項目を抽出し思いやり尺度とした。

思いやり尺度は全10項目であり、評定は「当てはまらない」(1点)から「当てはまる」(5点)の5件法とした。得点は加算式とし、質問項目にあてはまるほど、思いやりの程度が高いとした。思いやり尺度全10項目を用いて、因子構造と信頼性を確認の上、必要であれば項目を絞り込むことにした。

3) 聖なる空間尺度

私たちが暮らす居住空間のなかには、自分が家族の一員としてここにいる意味を感じることのできる静的な影響力を持つ場所があると私たちは考えている。そういった場所は、仏壇のある部屋や、神棚のある場所といった、家族が心理的にどこか外に開かれて、別次元の世界とつながるような場所であることが多い。しかし、現代日本の家族には仏壇や神棚をおいていない家庭も多く、そういった家庭では、そのような機能はどういった形で現れているのだろうかという疑問が生じる。私たちは、ここでそういった場所を、家族成員のうちの誰か特定の人のためというわけではなく、家族の成員がみなで大切にしている場所というように考えてみることにした。そして、それは実際の場所がどうであるかというよりも、その人がそのように感じることでできる場所を家庭に持っていると感じているかどうかということに焦点を当てることにした。そこで、この点を明らかにする尺度を独自に作成する必要が生まれた。

このように作成された「聖なる空間」尺度は全6項目であり、評定は「当てはまらない」(1点)から「当てはまる」(5点)の5件法とした。得点は加算式として、質問項目にあてはまるほど、「聖なる空間」を家庭での身近な体験として感じている程度が高いとする。なお、項目に逆転項目は含まれない。この質問項目の作成に当たっては、まず予備的に、こういった意味で思いつく表現をゼミ生同士で自由に出し合い、そこからKJ法にならって整理分類してゆき、必要と思われる6項目に絞ることとした。

4) 伝統的形式にのっとり「聖なる空間」に関する質問

「聖なる空間」を生み出す装置として私たちが日常の生活の中に取り入れているものとして、ここでは「先祖の写真」、「仏

壇」、「神棚」を取り上げ、その有無を問うこととした。

「先祖の写真」とは、現在の家族の成員ではなく、かつて成員であって現在は亡くなっている人、あるいは成員の現在は亡くなっている父母、祖父母といった親族等の写真を指す。

また、仏壇、神棚等は特定の宗教とつながるものであり、キリスト教徒であればその持つ意味合いは当然異なってくる。その点について本研究の調査対象となった学生は大方が特定の宗派にかたまった集団ではないという前提の下に本調査を行うこととした。

2. 調査対象者

京都府内の私立A大学生160名。記入漏れにより26名の回答を廃棄したため、対象者の最終人数は134名（平均年齢：21.8歳 標準偏差：5.48）となった。その内訳は男性45名（平均年齢：21.5歳 標準偏差5.41）、女性89名（平均年齢21.4歳 標準偏差：4.69）であった。

3. 質問紙

- 1) 家族のつながり尺度：先行研究をもとに新たに作成した上記の「家族のつながり」尺度を用いた。評定は「当てはまらない」（1点）から「当てはまる」（5点）までの5段階でもとめた。
- 2) 思いやり尺度：先行研究をもとに作成した上記の思いやり尺度を用いた。評定は「当てはまらない」（1点）から「当てはまる」（5点）までの5段階でもとめた。
- 3) 聖なる空間尺度：「聖なる空間」を身近に感じる体験をしている程度を測定する尺度として、独自に作成した「聖なる空間」尺度を用いた。評定は「当てはまらない」（1点）から「当てはまる」（5点）までの5段階でもとめた。

- 4) 伝統的形式にのっとった「聖なる空間」に関連する質問項目：各家庭における問A「先祖の写真」、問B「仏壇」、問C「神棚」の有無を2件法で求めた。

4. 調査時期と実施手続き

上記の尺度からなる質問紙を、私立A大学において心理学の講義時間を利用して集団的に施行した。施行前に、調査目的、データの取り扱いおよび調査対象者のプライバシー保護の説明をおこなった。所用時間は10～20分であった。調査時期は、2005年5月であった。

V. 結果

1. 各尺度の項目分析と因子数、内的整合性の確認

(1) 家族のつながり尺度

TABLE 1は各項目の平均と標準偏差を示したものである。平均±標準偏差の値が得点範囲（1－5）を超えた項目1、項目12、項目17、項目21の質問項目を天井効果・フロア効果が生じたものと判断し、因子分析に持ち込まなかった。また、項目13、項目15については、他の項目に比べて標準偏差の値が小さすぎたため、不良項目と判断し、因子分析に持ち込まなかった。

「家族のつながり」に関する質問項目にたいして、主成分解、バリマクス回転による因子分析をおこなった。その結果、固有値の推移により1因子解を適当と判断した。その結果として著しく共通性の低かった項目28を除外して、再度1因子解を仮定した因子分析を実行した。

最終的に分析した項目数は21項目となった。このとき1因子による累積説明率は47.1%であった。バリマクス回転後の各項目の因子負荷量をTABLE 2に示す。

家族のつながり尺度全21項目の得点を合計し、家族のつながり尺度総得点とした。全21項目を用いて算出した α 係数は、 $\alpha =$

0.93であり因子の内的整合性が確認された。

TABLE 1 家族のつながり尺度の質問項目の評定得点の平均と標準偏差

項目	Mean	SD	項目	Mean	SD
(1) *	4.02	1.30	(15) *	1.84	0.68
2	3.20	1.21	16	2.60	1.14
3	3.39	1.32	(17) *	3.73	1.37
4	3.63	1.19	18	3.26	1.23
5	3.32	1.24	19	3.18	1.10
6	3.49	1.26	20	3.04	1.25
7	3.39	1.36	(21) *	2.03	1.21
8	3.05	1.35	22	3.09	1.38
9	2.32	1.29	23	2.50	1.37
10	2.78	1.42	24	3.14	1.17
11	3.52	1.27	25	3.08	1.41
(12) *	3.97	1.15	26	2.61	1.29
(13) *	1.84	0.72	27	3.01	1.40
14	3.55	1.16	28	3.52	1.13

※ () * は不良項目と判断した。

(2) 思いやり尺度

TABLE 3 は各項目の平均と標準偏差を示したものである。

「思いやり」に関する質問項目にたいして、主成分分解、バリマクス回転による因子分析をおこなった。その結果、固有値の推移により1因子解を適当と判断した。

最終的に分析した項目数は10項目となった。このとき1因子による累積説明率は36.9%であった。バリマクス回転後の各項目の因子負荷量をTABLE 4に示す。

思いやり尺度全10項目の得点を合計し、

思いやり尺度総得点とした。全10項目を用いて算出した α 係数は、 $\alpha=0.80$ であり因子の内的整合性が確認された。

(3) 聖なる空間尺度

TABLE 5 は各項目の平均と標準偏差を示したものである。平均±標準偏差の値が得点範囲(1-5)を超えた項目1、項目5、項目6はフロア効果が生じていると考えられたが、G-P分析を行った結果、得点範囲を超えていないため全ての項目を因子分析に持ち込んだ。

TABLE 2 家族のつながり尺度の分析結果（因子分析・バリマクス回転）

項目 No.	第1因子	共通性
27 <u>私の家族は、他の家族よりも親密である。</u>	0.84	0.71
8 私の家族では、自由な時間を家族と共に過ごしている。	0.81	0.65
6 私の家族は、互いに信頼しあっている。	0.79	0.63
9 私の家族は、みんなで一緒にしたいことがすぐに思いつく。	0.76	0.58
26 私の家族は、皆で何かをすることが好きである。	0.75	0.56
7 その日の出来事を家族に話す。	0.75	0.56
2 私の家族では、何か決めるときに互いに相談する。	0.75	0.56
20 私の家族は互いに敬意を払っている。	0.71	0.51
11 私の家族では、家族の方が他人よりも互いに親しみを感じている。	0.71	0.50
4 私の家族は、互いに安心する空間を、家族の中に持っている。	0.70	0.49
10 私の家族は、互いに密着している。	0.70	0.49
19 私の家族では、問題の性質に応じて、その取り組み方を変えている。	0.68	0.46
24 家族の決まりは、必要に応じて変わる。	0.68	0.46
18 私の家族では、問題の解決のために子供の意見も聞いている。	0.66	0.44
22 家族から悩みを打ち明けられることがある。	0.63	0.40
23 家族旅行によく行く。	0.62	0.39
25 <u>私の家族は、いつも一緒に食事をしている。</u>	0.59	0.35
3 私の家族は、お互いに年齢を覚えている。	0.56	0.31
5 私の家族では、子どもの言い分もちゃんと聞いてしつけをしている。	0.53	0.28
14 家族からもらったものは互いに大事にしている。	0.50	0.25
16 自分自身より、家族を優先する。	0.47	0.22

※（ ）*は不良項目と判断した。

TABLE 3 思いやり尺度の質問項目の評定得点の平均と標準偏差

項目 No.	Mean	SD	項目 No.	Mean	SD
1	3.16	1.14	6	3.02	1.20
2	3.63	1.28	7	4.48	0.83
3	3.64	1.13	8	4.29	0.94
4	2.71	1.31	9	4.25	0.96
5	2.64	1.17	10	3.83	1.09

TABLE 4 思いやり尺度の分析結果（因子分析・バリマクス回転）

項目 No.	第1因子	共通性
9 知らない人が落として散らばった荷物を、一緒に集めてあげる。	0.78	0.61
8 見知らぬ人がハンカチなどを落としたとき、教えてあげる。	0.77	0.60
10 けが人や急病人がでたとき、介抱したり救急車を呼んだりする。	0.70	0.50
3 転んだ子どもを起こしてやる。	0.60	0.37
7 知らない人に頼まれて、カメラのシャッターを押してやる。	0.59	0.35
1 列に並んでいて、急ぐ人のために順番を譲る。	0.57	0.33
5 何か探している人には、こちらから声をかける。	0.55	0.31
4 列車などで相席になったお年寄りの話し相手になる。	0.49	0.24
6 バスや列車で、立っている人に席を譲る。	0.42	0.17
2 お店で、渡されたおつりが多かったとき、注意してあげる。	0.41	0.17

「聖なる空間」に関する質問項目にたいして、主成分解、バリマクス回転による因子分析をおこなった。その結果、固有値の推移により1因子解を適当と判断した。

最終的に分析した項目数は6項目となった。このとき1因子による累積説明率は76.2%であった。バリマクス回転後の各項目の因子負荷量をTABLE 6に示す。

聖なる空間尺度全6項目の得点を合計し、

聖なる尺度総得点とした。全6項目を用いて算出した α 係数は、 $\alpha=0.93$ であり尺度の内的整合性が確認された。

2. 「聖なる空間」の高低による家族のつながり得点、思いやり得点の差異

被調査者134名（男性45名、女性89名）について、聖なる空間尺度得点が20点以上を高得点群（上位25%を抽出）、10点以下

TABLE 5 聖なる空間尺度の質問項目の評定得点の平均と標準偏差

項目 No.	Mean	SD
1	2.08	1.25
2	3.16	1.53
3	2.98	1.38
4	2.58	1.36
5	2.35	1.55
6	2.29	1.34

TABLE 6 聖なる空間尺度の分析結果 (因子分析・バリマクス回転)

項目 No.	第1因子	共通性
6 家族みんながいつもきれいにしている部屋がある。	0.94	0.90
4 ふだんみんなが大切にしている部屋がある。	0.93	0.87
5 何か特別なときに使う部屋がある。	0.93	0.87
1 家族が一目置いている部屋がある。	0.87	0.76
2 仏壇などを大切にしている。	0.80	0.64
3 家の中に日常の嫌なことを忘れられる空間がある。	0.71	0.51

を低得点群 (下位25%を抽出) とした。各群の人数、家族のつながり尺度、思いやり尺度の平均得点と標準偏差は TABLE 7 のとおりである。

まず、家族のつながり尺度について1要因の分散分析をおこなった結果、群の効果は有意であった ($F(1,69) = 35.45, p < .01$)。つまり、聖なる空間を強く意識している者の方が家族のつながりを強く意識していることが明らかになった。

次に、思いやり尺度について1要因の分散分析をおこなった結果、群の効果は有意であった ($F(1,69) = 4.61, p < .05$)。

したがって、聖なる空間を強く感じている者は、思いやりを強く感じていることが明らかになった。

3. 「先祖の写真」、「仏壇」、「神棚」の有無からみた家族のつながり、思いやりの差異

① 「先祖の写真」の有無からみた家族のつながり、思いやりについて

被調査者134名 (男性45名、女性89名) のうち、問Aに「いいえ」と答えた群を「先祖の写真を飾っていない」群、問Aに「はい」と答えた群を「先祖の写真を飾っ

TABLE 7 各群の家族のつながり尺度および思いやり尺度の平均得点と標準偏差

		(聖) 高得点群 (N=29)	(聖) 低得点群 (N=43)
家族のつながり	Mean	75.82	51.69
	(S D)	(17.28)	(16.44)
思いやり	Mean	37.31	33.92
	(S D)	(6.91)	(6.24)

ている」群とした。各群の人数、家族のつながり尺度、思いやり尺度の平均得点と標準偏差は TABLE 8 のとおりである。

まず、家族のつながり尺度について1要因の分散分析をおこなった結果、群の効果は有意であった ($F(1,69) = 19.56, p < .01$)。したがって、先祖の写真飾っている家庭の子どもは家族のつながりを強く

意識していることが明らかになった。

同様に、思いやり尺度について1要因の分散分析をおこなった結果、群の効果は有意であった ($F(1,69) = 7.30, p < .01$)。つまり、先祖の写真飾っている家庭の子どもは、家族のつながりと同様に思いやりも高いことが明らかになった。

TABLE 8 写真なし群、写真あり群の家族のつながり尺度および思いやり尺度の平均得点と標準偏差

		写真なし群 (N=43)	写真あり群 (N=28)
家族のつながり	Mean	56.27	69.64
	(S D)	(18.01)	(21.75)
思いやり	Mean	33.65	37.85
	(S D)	(7.14)	(5.05)

② 「仏壇」の有無からみた家族のつながり、思いやりについて

被調査者134名(男性45名、女性89名)について問Bに「いいえ」と答えた群を「仏壇なし」群、問Bに「はい」と答えた群を「仏壇あり」群とした。各群の人数、家族のつながり尺度、思いやり尺度の平均得点と標準偏差は TABLE 9 のとおりである。

まず、家族のつながり尺度について1要因の分散分析をおこなった結果、群の効果は有意であった ($F(1,69) = 5.56, p < .05$)。したがって、「仏壇あり」群は家族のつながりを強く感じていることが明らかになった。同様に、思いやり尺度についても分散分析をおこなったが群の効果は認められず、仏壇の有無により思いやりの程度に違いがないことが明らかになった。

TABLE 9 「仏壇なし」群、「仏壇あり」群の家族のつながり尺度および思いやり尺度の平均得点と標準偏差

		「仏壇なし」群	「仏壇あり」群
		(N=37)	(N=34)
家族のつながり	Mean	56.21	67.35
	(S D)	(16.91)	(22.65)
思いやり	Mean	34.78	35.88
	(S D)	(6.77)	(6.65)

③ 「神棚」の有無からみた家族のつながり、思いやりについて

被調査者134名（男性45名、女性89名）について、問Cに「いいえ」と答えた群を「神棚なし」群、問Cに「はい」と答えた群を「神棚あり」群とした。各群の人数、家族のつながり尺度、思いやり尺度の平均得点と標準偏差は TABLE10のとおりである。

まず、家族のつながり尺度について1要

因の分散分析をおこなった結果、効果は認められず、神棚の有無が家族のつながりを感じる程度に影響しないことが明らかになった。

次に、思いやり尺度について1要因の分散分析をおこなった結果、群の効果には有意傾向が認められ（ $F(1,69) = 3.85 + P < .10$ ）、家族のつながりとは対照的に神棚の有無が思いやりの強さに影響していることが示唆された。

TABLE10 「神棚なし」群、「神棚あり」群の家族のつながり尺度および思いやり尺度の平均得点と標準偏差

		「神棚なし」群	「神棚あり」群
		(N=50)	(N=21)
家族のつながり	Mean	60.12	64.95
	(S D)	(19.24)	(23.39)
思いやり	Mean	34.32	37.66
	(S D)	(7.07)	(5.08)

VI. 考 察

1. 各尺度の作成について

(1) 家族のつながり尺度

最終的に家族のつながり尺度として残した21項目に関して、 α 係数が0.93という確

かな数値であり、信頼性の高い尺度になっているといえる。尺度の妥当性に関しては、本来理想と現実の家族機能を測定するために作成された「家族機能測定」尺度（草田・岡堂、1993）の諸項目のうち、家族の凝集性に関わると私たちが判断した項目、および私たちが独自に作成した項目の混在で

はあるものの、その選定に当たって複数のゼミ生による議論を経ていることは、現代の家族のつながりをどう考えるかという一般的な考え方と離れたものではないと考えている。

ここで「つながり」というのは、各項目を見ると分かるように家族成員が互いに時を共有して暮らすことによって派生するさまざまな家族内の現象である。そこには当然密度の濃い関係が生まれ、それは時に反発を生み緊張感を家庭内にもたらしもするが、それを同じ家族成員として関係を深める方向に維持しようとするとき、このような家族のつながりというイメージで示される項目に見られるような家族間の関係の持ち方が生まれると考えられる。

(2) 思いやり尺度

思いやり尺度の α 係数は0.80であり、(これも)この尺度の信頼性は十分なものであることを示している。ここでの思いやり尺度は、家族成員間の互いへの配慮というものに限定するのではなく、広くさまざまな対人場面で他者に対する配慮のある行動に向かいやすいかどうかをみるためのものである。

(3) 聖なる空間尺度

聖なる空間尺度の α 係数は0.93であり、信頼性を見る上で(は)確かな数値となっている。

この尺度は、家族が共有する居住空間の中に、日常的な生活のためだけにあるのではない、家族全員がそれに対して尊重し、大切にしたいと思うような場所を持っているかどうか、そしてそれが家族成員にとって心を癒すような場となっているか、といったことが捉えられるような尺度にしようと考えた。また、ここでは具体的な物質として居住空間のなかにあるべきものや場所を想定しているのではなく、そういった気持ちになれる空間を日常の家族と暮らす空

間の中に感じているのかどうかを見るためにこの尺度を使用することとした。

2. 「聖なる空間」の体験と家族のつながりおよび他者への思いやり

上記のように、人が日常暮らす家庭の居住空間の中に、家族成員が共通して大切にしようとする場を持ち、また、そういった場によって一息つくことができるという感じをより多く抱くものが「聖なる空間」尺度によって高得点群として現れていると考えた。そうすると、相対的にそういった感じを抱いていないと考えられる「聖なる空間」低得点群に比べ、家族のつながり、他者への思いやりともにそれぞれ高い得点であることが読み取れる。

「聖なる空間」尺度には、「家族みんながいつもきれいにしている部屋がある」や、「ふだんみんなが大切にしている部屋がある」といった項目があり、これらはある意味で家族のつながりを高める行動であって、ここに有意な得点の差異が見られるのもむしろ当然ともいえるかもしれない。

一方、そういった共通空間への配慮が同時に他者への配慮の高さにもつながっており、場所への配慮が他者への思いやりと関連しているという点は、非常に興味深いものである。筆者の一人は、かつて「気配り」ということを考察する中で、対人的な気配りよりは、環境への気配り、自分の身の回りを居心地のよい場所にしようとするのが、かえって対人的に心地よい関係を気づくために役立つのではないかと指摘したことがあるが(濱野、2003)、この結果はそういった観点を支持するものとなるのではないかと思われる。

3. 「先祖の写真」を飾っていること、もしくは「仏壇」があること、「神棚」があることという現実的環境の特徴と家族のつながり、思いやりについて

「先祖の写真」を飾っているという家庭

は、興味深いことに家族のつながりにおいても、思いやりにおいても、ともに「先祖の写真」を飾っていない家庭に比べて高い得点を示している。あまり単純化しすぎないほうがよいとはいえ、「先祖の写真」を飾ることそのものに、家族意識を刺激し、また、他者への配慮、とりわけ老人への配慮を促進する可能性は一考に値するであろう。

また、仏壇を置いているか、いないかによって二つの群に分け、家族のつながりや思いやりについて検討してみたところ、ここでは家族のつながりにのみ有意な差が見られ、思いやりには差が見られなかった。仏壇には、先の「先祖の写真」がおかれていることも多いと思うが、お盆のときなどにそこに集まってお祈りをする場合、それは明らかに家族のつながりを意識する経験を提供する場になっていると考えることができるだろう。

その一方で、仏壇においては関連が見られなかった一般的な他者への思いやりという性質が、神棚の有無と関連している可能性が見られたことも興味深い結果である。神棚は仏壇に比べ、家族の中であって、家族がその場をめぐる関係しあう度合いが少ない。私たちにとって、神様は先祖の仏様のように個別化したものではないことが多い。そういう場が私たちの人間関係に影響しているとすると、それは個別の家族のつながりというよりも、ごく一般的な人と人との間の思いやりという点に少し関係がありそうだということになる。神棚を意識する感覚は「お天道様がみている」という感覚と通じるものであり、それは家族のつながりを感じやすい仏壇や写真とはまた異なった場を提供すると考えられる。

4. 居住空間について

上記の考察を踏まえて、あらためて居住空間のもつ意味について少し検討しておきたい。そもそも人間にとって居住空間とい

うのは、動物でいう巣やなわばりに相当する。なわばりの語源は「縄張り」であって、神聖な場所に縄を張り、周囲と区別することからきている。このことからわかるように、居住空間を見ればそこに住む人のことが理解できると思われており、また、人は自分を表現する手段として居住空間を利用する。自分の好みに沿って空間を作り変えることとそこに思い出が積み重ねることによって、その人にとって居心地のいい環境ができあがり、その場所への愛着が生まれる。

「居は気を移す」と昔から日本では言われる。空間のありようが、そこに住む人間の意志までも規定するのである（上田篤、1981）。居住空間は私たちがそこで日常の暮らしを営み、育んできた環境的空間であるため、そこには当然私たちの生活の背景にある文化的な要素も色濃く反映されている。たとえば、日本建築には文化に見合った多くの工夫が隠されている。

さらに桑子敏雄（2001）は、感性の哲学的考察を通じて障子やふすまが人格形成上良い影響をもたらすことを示唆している。障子やふすまで仕切られた部屋は、遮音性が悪いという面はあるものの、同じ屋根の下に住む家族の気配が感じられることにより、孤独を感じることも少なかったであろう。そして、子どもは家族が話している内容が聞こえてしまうという体験をもとに、プライベートなことは聴かないことにし、見ないことにするという高度な抑制を学ぶことになる。つまり、障子とふすまは自分と他者との距離の測り方を教えてくれる高度な文化的装置であったといえるのである。親や他者のことを思いやることを知り、隣人を気づかうようになり、人のことを考えて行動するという独特な文化が育まれる背景に、こういった居住空間の特質が関与しているのではないだろうか。

このように、居住空間は単なる寝食の場ではなく、人間にとって重要な意味を持つ

環境である。人間は住むということを通して居住空間に働きかけているとともに、多くのものを受容しているということが分かる。

今回の調査では「先祖の写真」、「仏壇」や「神棚」といった居住空間のなかにある外的な物理空間の存在が少なからず家族におけるつながりや、対人関係全般への思いやりの高さに影響していることを明らかにした。一方、「聖なる空間」で表現されるような家族成員がみなで大切にしている空間を持っていると内的に強く感じられることについても同様であった。このことは、先祖や神とのつながりを意識する物理的な空間の存在と家族全体で大切なものとして共有できる心理的空間の両面が様々な人間関係や家族のつながりの質に影響していると言える。

本論で見てきたように、居住空間に私たちは思いのほか影響を受けており、その具体的なありようが、いろいろなレベルで私たちの生活の質、人間関係の質を左右する可能性があるとする、こういった居住空間の特質をより自覚的に捉えなおし、検討していくことが今後ますます必要になっていくものと思われる。

参考文献

- 村瀬佳代子 (1986) 子どもの心理療法と自然：その1. 子どもの心理療法過程に登場する動植物
大正大学カウンセリング研究所紀要第9巻
Pp.1-10
- 村瀬佳代子 (1987) 心理療法と自然：その2. 心理療法過程に登場する動物の治療的意味
大正大学カウンセリング研究所紀要 第10巻
Pp.38-63
- 上田篤 (1981) 日本の住宅—その構造と機能 月刊NIRA 3 (10) Pp.4-9
- 渡辺武信 (1988) 住まい方の演出—私の場を支える仕掛けと小道具 中公新書

桑子敏雄 (2001) 感性の哲学 日本放送出版協会
Olson, D.H., McCabbin, H.I., Larsen, A., Muxen, M., & Wilson, M. (1985) Family Inventories. St.Paul, MN: Family Social Science, University of Minnesota.

草田寿子・岡堂哲雄 (1993) 家族関係査定法 岡堂哲雄 (編) 心理検査学 垣内出版 Pp.573-581.

Rushton, J.P., Chrisjohn, R.D., & Fekkin, G.C. (1981) The altruistic personality and the self-report altruism scale. Personality and Individual Differences, 2, 293-302

菊池章夫 (1988) 思いやりを科学する—向社会的行動の心理とスキル 川島書店

濱野清志 (2003) 気からみたトランスパーソナルな次元と個人のかかわり 現代のエスプリ435 トランスパーソナル心理療法 諸富祥彦・藤見幸雄 (編) 至文堂 Pp.99-107.

謝辞

本論は2005年度前期3年生濱野ゼミの演習において、参加者全員で取り組んだ調査、研究の一部である。参加者名を以下に記す。学生は、文献を検討するチームと一つと、質問紙を検討するチーム二つの三つのチームに分かれてそれぞれ演習を行った。本論の文献的検討は、そのときの学生の検討が基礎となっている。また、研究を進めるにあたって、調査の方法や分析に当たって多大な協力をいただいた二人のスタッフにも共同執筆者となっていたいただいたことを記しておく。

学生氏名：原絵梨香、大隅雅史、喜多沙知子、木村勇介、永松優子、松田憲泰、和氣家彩果、亀嶋泰光、脇岡真衣子、藤井直樹、市原麻衣、江原陽子、大辻昌秀、川田紗登美、上代祐子、増田裕紀、矢野朋美

ABSTRACT

The Effect of Living Space on Human Relations

Kiyoshi HAMANO, Takanobu BABA & Ai OKADA

The quality of living space is one of the important factors which influence the way in which one's personality develops. There are two aspects in the concept of living space. One is the ordinary space where one spends one's daily life and the other is the sacred space, which doesn't belong to one specific member of one's family and which is cared for by all family members. This study focuses on the latter type of space and attempts to determine whether the presence of a sacred space in one's family life influences the degree of family cohesiveness and one's altruistic tendency.

The results showed that family members of the high score group on the sacred space scale are significantly more cohesive than those of the low score group and that the high score group on the sacred space scale is significantly more altruistic than the low score group. Moreover it was revealed that whether or not one has in one's house a concrete object such as a butsudan (Buddhist altar), kamidana (household Shinto altar) or some pictures of one's ancestors has some influence on the psychological qualities of family cohesiveness and a tendency toward altruism.